

シューベルトの連弾作品

6つの大行進曲 より 第3番

当時は歌曲と並んで舞曲や行進曲なども人気が高く、シューベルトも様々な曲種のピアノ連弾作品を書き、生前に出版されたものも多い。本曲は 1818 年あるいは 1824 年に書かれ、1825 年に出版。口短調の主部に対して、やさしく穏やかな口長調のトリオではシューベルトの歌謡性があふれ出す。

4つのレントラー

レントラーとはドイツ語の Land(田舎)から来ており、ゆったりとした 3 拍子の田園風舞曲である。本曲は 1824 年の作で、出版は 1869 年。どこか懐かしい旋律に心が和む。

6つのポロネーズ より 第1番

ポロネーズとは「ポーランドの」という意味で、祝祭的な雰囲気を持つ 3 拍子の舞曲。シューベルトの連弾によるポロネーズ曲集は 2 つあり、どちらも生前に出版されている。本曲は、作曲・出版ともに 1826 年。非常に丁寧に書かれており、ポロネーズの特徴的なリズムが生かされた名作。

2つの性格的な行進曲 より 第1番

作曲年は不明、出版は没後の 1829 年。打楽器ペダルが大活躍する賑やかな行進曲で、トリオは優雅な舞曲調。

フランス風の主題によるディヴェルティスマン より 第2番 アンダンティーノと変奏

全 3 曲からなる《フランス風の主題によるディヴェルティスマン》の作曲時期は不明。この第 2 番は 1827 年に出版。口短調の主題と 4 つの変奏からなり、痛切な響きの主題が心を打つ。最終変奏で口長調に転じて、陽だまりのような暖かさを感じるが、それもつかの間、再び悲しみに閉ざされて終曲する。

ロンド イ長調

最晩年に書かれた連弾の傑作で、10 分を超える大曲ながら、隅々まで優しさが染みわたっている。シューベルトが亡くなる 1828 年に書かれ、死の 1 ヶ月後に出版。シューベルトの曲にはめずらしく短調の響きがほとんど聴かれず、穏やかに旋律を紡ぎ、最後は別れを惜しむようにそっと曲を閉じる。

創作主題による 8 つの変奏曲

作曲は 1824 年で、翌年出版。自作オペラのお蔵入りなどの挫折を乗り越えて、創作意欲を取り戻そうとしていた時期の作品で、シューベルト自身も「幸福と平穏を自分のなかに見つけられるようになっている」と語り、本作の出来には自信を見せている。どこか物憂げな主題に 8 つの変奏が続く。短調の第 5 変奏は憂愁に閉ざされ、第 7 変奏では印象派を先取りしたかの

ような色彩感のある和声のなかに静かな痛みが感じられる。最終変奏は、それでも再生へ向かわんとする明るい気持ちにあふれている。

幻想曲

シューベルト最晩年の傑作である本曲は 1828 年に書かれたが、出版は死後半年経った 1829 年。シューベルトが好んだへ短調で書かれ、20 分近いボリュームを誇る。ひたひたと思いに沈むような主題が印象的なアレグロ楽章、和音の強打で始まる規格外の緩徐楽章、軽快な主部に優美なトリオが付いたようなスケルツォ楽章、そして冒頭楽章の再現であるフィナーレ楽章といったふうに、《さすらい人幻想曲》(1822)と同じく、大きく 4 つの楽章に分けることもできる。